

子どもの遊びと集団

犬 飼 己紀子

地域に、子ども集団が見られなくなって久しい。かつて、地域には石蹴り・ゴム飛び・縄飛び・メンコ・草野球、自然を相手にしたかくれんぼ・草花遊び・川遊び・土遊び、と数え挙げたらきりのない子ども達の遊び文化があり、そこには子ども集団が存在した。空き地や軒下、路地裏は子ども達の集会場であった。必ず流行りの遊びがあり、共通の遊び欲求を持った子ども達は、技術を競い合い、教え教わりする為の仲間を求め集まった。一時遊び興じた後「面白かったね・又明日も遊ぼうね」「負けて悔しい・明日は負けないぞ」といったそれぞれの思いを抱き、夕暮れの中を空腹をかかえて我家へと散っていった。

子どもを取り巻く社会問題が取りざたされる中、幼児から児童期にかけての遊び体験の欠如からくる社会性未発達が、その一因として取り上げられている。

幼児・児童期における仲間との豊かな遊び体験が、社会的人間育成に欠かせないといった論理は、多方面からその重要性が指摘されている。ここでは、豊かな遊びを可能にする子ども集団が、いかに形成されていくのかについて考えてみたい。

「何故、子ども達は集団で遊ばなくなったのだろうか。」という表題の疑問を裏返し「子ども達は何に集まるだろうか」について、K・レヴィンのグループ・ダイナミクス（集団力学）を参考に探ってみた。

●集団の形成

我々の身近な集団の多くは、社会的要請と個人の心理的必要性から生み出されたも

のである。社会的要請は、個人の中に社会規範に従う(同調する)必要性を感じさせ、集団を形成するうえで個人の心理的働きの一つの側面となるものである。しかしここでは、子どもの遊び集団を論じる立場で、社会的要請といった、他からの働きかけによって形成される集団とは異なることを頭に置き、個人の心理的必要性という点から、集団の形成を考えてみた。

①共通の目的を持っている

「人は、自分の能力とか、自分の持っている意見を他の人達のそれと比較して、自分の能力や意見の価値を決めたがる傾向がある。」

子ども達は、流行りの遊び(共通目的)に興じ、自分の技術や楽しみ方を仲間に見せ、自己の価値を知る欲求を仲間との係わりの中に求めて集まるだろう。独楽まわしに夢中になっている遊び集団に、ケン玉をしたい子が交わろうとしないのは自然であろう。集団形成には、共通の遊びへの興味の有無が重要なポイントといえる。

②衆知を集める

「より高次の目的を追う為に、専門家の知恵を必要としたり、同じ立場の人達が集まって相談することが必要となる。」

同じ遊び目的を持つ子ども達は、より高次のレベルでの遊びを追求して仲間と創造的活動をしたり、自分より高いレベルにいる人(魅力ある人)を求めて集まる。遊び内容の方向付けに、刺激を与える人や物が必要である。

③個人の理想を求める

「人間性を豊かにしていきたいという個人的理想が、仲間グループを作らせる。」

何よりも、楽しみたいという子どもの欲求が、遊びの仲間集団を作り出す。従って、楽しさを伴う体験と共に「又、やりたいね」という次への期待を持たせることは、集団での活動を継続させていく上で欠かせない条件である。

以上のように、共通の遊び目的を持ち、より高次の楽しい活動を求めて、子ども達は集まるということになる。しかし、集団に入り活動するということは、同時にこれらの個人的欲求や欲望をある程度犠牲にしなければ、集団として活動の継続は成り立たないことも事実である。従って、子どもにとって多少の個人的欲求・欲望を犠牲にしても、それに勝る魅力がつかまとうものでなければ、自発的遊び集団の形成・継続

は困難ということになる。

● 集団への参加

集団への参加姿勢には、大別して次のような形が挙げられる。強制的に参加させられているもの、自発的に参加しているもの、その中間的なものの3種である。

幼児から児童期にかけ、子ども達は保育園・幼稚園・学校といった集団の中で生活をする。その参加姿勢は、個人によって異なるが、強制・自発・半自発的参加のいずれかであろう。入園・入学時、参加姿勢が前述のいずれであっても、集団活動をしていくうちに個人にとって半自発参加そして、自発参加へととなり得る活動・学習の機会が提供されていかなければならない。しかし、ここ数年の不登校児増加の傾向は、このような子どもにとって、学校集団が、自発参加の場となり得ていない状況を写し出している。さらに、不登校児として表面化する一歩前の子ども達の状況に目を向けて見ると、彼等は、学校という集団への社会的参加要請を受け、個人の中で同調の必要性を感じ参加している。といった集団参加のレベルにとどまっている様子が伺える。このような集団体験しか持たない子どもにとって、遊び集団活動への誘いは、煩わしく、疲れる事以外の何ものでもないのかも知れない。

● 集団の発達

群衆としての存在であった子ども達が、一体感や同調の必要性を感じ集団を形成する。K・レヴィンは、集団が集団らしくなっていく為に、少なくとも次の4つの条件を含むとしている。1つは、集団としての目標をはっきりとさせること。2つめに、一人一人がその中で機能していく為の役目を持つこと。3つめに、特徴ある（他と区別されるものを持つ）集団として、独特の基準を持つこと。4つめは、集団内に許容的雰囲気があること。以上である。

ファミリー・コンピューターが、発売と同時にたいへんなブームを巻き起こした。新しいソフトが発売される度、販売店には大勢の子ども達の列ができた。ここで、その遊びの良し悪しを論じるものではないが、とにかくそこには流行りの遊びがあった。そして、子ども達は、ゲームソフトを持ち寄り、皆でテレビ画面と遊んだ。

時間、空間、そして仲間も多様な環境の中で減ってきてはいるが、まだまだ…、いや永遠に存在するのである。欠けてきたのは、皆と何かをして楽しみたい、という子どもの中から沸いて出る筈の欲求ではないだろうか。物の豊かな時代になり、必要なものに事を欠かさない生活が当たり前になっている。忙しい大人達の生活リズムに付き合い合わされる子ども達は、行動する前に促され、必要以上に物をあたえられ、知識を詰め込まれ、豊かさの中で欲求の育ちを阻害されてきているのではないだろうか。

川辺町児童センター、吉本千賀子氏も現在の子どもの遊びに対する大人の無関心、無理解を問題として取り上げ、センターでの活動を通じて社会への呼掛けを行なっていきたいと報告されている。時間・仲間・空間といった環境は再創造し得るものである。地域子ども集団、そこには強制参加を促されたのではない完全自主参加の子ども達の姿がある。地域における子ども達の遊び集団こそ、本当の意味での自主性・社会性を育てる重要なものであろう。児童館・児童センターには、その核として場の提供、リーダー（魅力ある遊びの達人）の提供、集団活動への刺激といった方向からの良き支援を願い、子どもの遊び文化再創造、さらには開発まで期待するものである。

（本学助教授）